

集落活動の担い手育成の観点からみる都市農村交流活動

国際協力学専攻

47-096797 砂原 翠

指導教員：山路永司教授

キーワード：担い手、都市農村交流活動、集落活動、集落機能、波及効果

1. 序論

集落とは農山漁村の地域社会において共同生活を営む家々の集まりであり、従来から地域資源管理や利害調整、相互扶助、伝統文化の継承などの機能を有し、結果として国土保全や水源涵養等の多面的機能の発現を支えている。しかし、高度経済成長期を経て、量的にも質的にも集落の人口構造が大きく変化する中で、その機能を維持するのが困難な集落が増加し「限界化」に至る集落も少なくない。そのような危機的な状況に直面している一方で、地域にある資源を活用し、都市との交流を軸にして地域の活性化を図ろうとする動きも1990年代あたりより全国各地で広まって来ている。棚田オーナー制度や道の駅、グリーンツーリズムなどが一例である。本研究では、このように都市と農村の交流を通して地域の活性化を目的とする活動を「都市農村交流活動(以下、交流活動)」と呼ぶ。

2. 研究の目的

このような活動は、根底として集落機能の低下等の地域の課題を解決し、活力の向上へつなげていくことを目的としているが、その効果が地域全体へ波及しないケースもある。また、既往研究で交流活動の非経済的効果を扱った研究の中でも、波及効果に関する言及は少なく、十分ではない。そのことから、本研究では、集落機能の維持を支える担い手の育成の観点から、交流活動の集落全体への波及効果を捉え、集落活動につながる交流活動のあり方を示すことを目的とする。具体的に明らかにする項目は、以下の3点である。

(1)交流活動の担い手構造

(2)交流活動の展開過程における集落活動の担い手の育成状況

(3)集落活動の担い手育成の条件

3. 事例対象地域と具体的な調査対象の集落

事例対象地域は、埼玉県飯能市である。埼玉県の南西部、東京から約50kmに位置している。都心から近い一方で、総面積の約75%は森林で占められており豊かな自然環境に恵まれている。山間部では林業の不振から森の荒廃や少子高齢化、市街地では商店街の活力低下などの課題を抱えており、これらを解決する一つ的手段として、自然だけでなく伝統産業や歴史文化を生かしたエコツーリズムを2004年より環境省のエコツーリズム推進モデル地区のひとつとして実施している。2008年にはその実績が評価され、環境省の第4回エコツーリズム大賞を受賞している。

市内の各地域で実施しているが、その中でも、山間部に位置し、地域活性化を目的として活動を行う2つの集落に焦点を当てて本研究の調査を行うことにした。

4. 集落レベルの都市農村交流活動

事例対象とする集落は、上直竹上分集落(81人/24世帯)と北川集落(365人/142世帯)である。この2つの集落の主な違いは、取り組み段階と主体の属性である。前者は定着段階で新住民と旧住民が共に取り組んでおり、後者は発展段階で旧住民を中心とした男性住民の有志が取り組んでいる。

5. 結果と考察

(1) 都市農村交流活動の担い手構造

上分集落では、家が参加単位だが1軒を除くすべての家々が交流活動に参加しており参加率は高い。また、主たる担い手組織を構成するメンバーは新住民と旧住民が融合している。一方、北川集落は、個人が参加単位であるが、交流活動に参加する住民の割合は小さく、その担い手のほとんどは旧住民である。また、この集落の特徴は男女別で様々な団体が組織されている点である。

(2) 都市農村交流活動の展開過程における集落活動の担い手育成状況

量的な担い手の獲得には差が見られた。上分集落では、活動初期と現在を比べると、新住民が集落自治活動に参加するようになっており、新たな集落活動の担い手が誕生している。これは、新住民が発案したこの交流活動の企画を当時の自治会のメンバーがバッファー機能を果たす存在となり、旧住民と新住民の見えない価値観の差異を調整した結果が大きい。一方、北川集落では、元々集落活動を担っているメンバーが交流活動の担い手でもあるので、新たな担い手の誕生は見られない。ただし、従来の男女別の集落活動の枠を超えた、新たな協力関係が築かれ、他の集落活動へ繋がる活動となりつつある。

質的な担い手の育成は両方の集落で確認できる。ひとつは新住民や若い世代の集落の伝統的な技や知恵の継承の場が生まれ、認識が共有できる場となっている点である。もうひとつは、特に旧住民に当てはまることであるが、都市住民、つまり、集落の外部者のまなざしに触れることで、内在する価値へ自覚し、誇りの醸成に繋がっている点である。これら2点が住民の知恵や知識、認識を深め、活力を高めることに繋がっていることから、質的な担い手の育成がなされていると言える。

(3) 集落活動の担い手育成の条件

量的な担い手の獲得では、新住民が交流活動へ参加し、かつ、バッファー機能を果たすものが存在すること、質的な担い手の育成では、共同作業の場と外部者のまなざし、これが集落活動の担い手の育成条件として挙げられる。

6. 結論

以上の考察より、以下が明らかになった点である。

(1) 既存の集落活動の枠組みを超えた多様な主体の共同作業によって交流活動が行われている。

(2) 量的な担い手の獲得には、新住民と旧住民の枠組みを超えた融合が効果的である。ただし、バッファー機能を担う存在が必要。

(3) 既存の枠組みを超えた活動は集落住民の質的な担い手の育成の場になりうる。

(4) 外部者(=都市住民)のまなざしが住民の誇りの醸成につながり、質的な担い手の育成を促す。すなわち、集落活動の担い手育成の観点からみると、交流活動の集落全体への波及効果はある程度認められることがわかった。

以上をまとめたものが、図1である。

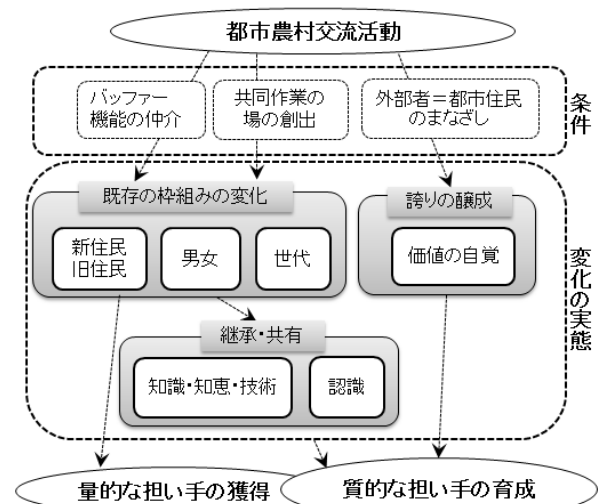


図1 都市農村交流活動を通じた集落活動の担い手の獲得と育成の構造 (筆者作成)

各集落の実態に合わせて、集落の上段の「条件」を整え、中段の「変化の実態」を引き起こすことができれば、集落活動の担い手の獲得や育成につながる交流活動になると考えられる。

【参考文献】

- ・生源寺眞一編『ふるさと資源の再発見』,家の光協会, pp.129-149.
- ・農村開発企画委員会(2007)『農村工学研究 小規模高齢化集落の存続』第75巻, 93.
- ・飯能市エコツーリズム推進室「里地里山の身近な自然や文化を活用した飯能市エコツーリズム」 pp.1-16